

関西学院大学 研究成果報告

2023年11月27日

関西学院 院長殿

所属：経済学部
職名：教授
氏名：原田哲史

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：ドイツ連邦共和国 ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間 <input type="checkbox"/> 関西学院外留学（滞在国： ）
研究課題	ドイツの重商主義・古典派・歴史学派の経済思想とその日本への紹介・影響に関する研究
研究実施場所	ハンブルク大学 経済・社会科学部
研究期間	2023年4月3日 ～ 2023年9月12日（5ヶ月+9日）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

< ドイツの重商主義 >

原田は18世紀のドイツ・オスナブリュックのユストゥス・メーザー（1720～94年）の経済思想がある種の重商主義であることをすでに論じたが、それをさらに深めて、6月6日オスナブリュックで“Aufklärung und Aufklärungskritik bei Justus Möser”（ユストゥス・メーザーにおける啓蒙と啓蒙批判）という演題で、一般に保守主義者として扱われるメーザーにもそれなりの啓蒙思想が含まれていることを、その日本での議論も含めて講演した。

これは、もともとユストゥス・メーザー協会主催のメーザー生誕300周年記念の連続講演のひとつとして招かれていたものであったが、コロナ禍で中止となっていたため、遅ればせながらやっと実現できた。

メーザー研究の大御所 W. ヴェスラー氏も出席されて、貴重な意見を聞くことができた。本講演は、伝統ある現地のジャーナル *Osnabrückicker Mitteilungen*（オスナブリュック報告）に掲載される予定である。

< ドイツの古典派 >

ドイツ独自の古典派それ自体についてはさほど深めることができなかったが、原田も委員の一人であるドイツ社会政策学会経済学史委員会が——通常はドイツ語圏の都市で開催されるが——古典派経済学の創始者アダム・スミス（1723～90年）の生誕300周年を

記念してスコットランドのエディンバラで開催されたので、それに出席した。

アダム・スミスの経済思想とその研究が上位テーマであった今回のこの委員会（専門部会の性格もある）で原田は報告しなかったが、スミス経済思想をめぐる当地での研究者らと交流を深めて、多くの有益な示唆を受けることができ、ドイツ固有の古典派についての研究のベースになる知見を得ることができた。

＜ ドイツの歴史学派 ＞

グスタフ・シュモラー（1838～1917年）を領袖とするドイツ歴史学派は1873年に創立された社会政策学会でもってその経済学を展開するが、そのなかで、非体系性その他の弱点を有していたシュモラーの経済学がW. ゾンバルト、E. ザリーン、A. シュピートホフによって彫琢されて現代の新制度派経済学を似たものにまで刷新された。しかし、1936年ナチス政権の圧力に直面して、それに屈するよりは自主解散を選んだ。

この内容を日本での反響も含めて論じた原田の論文“Auseinandersetzung um Gustav Schmoller hinter der Selbstaufösung des Vereins für Socialpolitik”（グスタフ・シュモラーについての論争、社会政策学会自主解散の背景で）が、8月に、上記の社会政策学会経済学史委員会による共著 P. Spahn (Hg.): *Zur Geschichte des Vereins für Socialpolitik*（社会政策学会の歴史に寄せて）に所収・出版された。

また原田は、この論文をベースにして、ハンブルク大学経済・社会科学部の経済学史教授エリーザベト・アルゲヴェア氏（今滞在のホスト教授）が主宰する経済学史ワークショップでも報告し、当地のおもに若手の研究者らと意見交換することができた。

＜ その他 ＞

上記の2論文を含めて、原田がこれまでドイツ語で発表・公刊してきた諸論文をまとめて単著の著書として出版するため、学院留学中にベルリンの老舗出版社と交渉し、その結果、8月にはその出版契約書を交わすことができた。なお、刊行は2025年の予定であり、タイトルは *Zur deutschen Geschichte des politisch-ökonomischen Denkens: Aus der japanischen Perspektive*（ドイツの政治・経済思想の歴史に寄せて——日本の見地から）である。

滞在中の資料収集としては、1920～30年代の『フリードリヒ・リスト協会報告』全号をハンブルク商工会議所の図書館で複写できたことや、1919年のリヒャルト・ゾルゲのハンブルク大学での博士論文と学位授与証明書のオリジナルを閲覧・複写できたことは、大きな収穫であった。

またハンブルク市での滞在において、この市がひとつの州をなすほどの勢いと自立性・自主性をもつことを、現実と伝統において実感できた。経済思想史研究者の原田にとって、とくに19世紀のドイツにおいてハンブルクが経済で自主性を有していたことが分かり、同じ民族でありながらそうあり得たことの意味を考えさせられた。現在、香港や台湾が大陸中国によって同じ民族だから統合されねばならないと言われているが、そうした発想は必ずしも常に妥当するわけではないことを痛感した。

以上のように留学での研究成果があったことを確認するとともに、あらためてそれを可能にくださった関西学院大学と、経済学部の教員・職員の皆さんに心からお礼申し上げます。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。